

# 島根大学 ラフカディオ・ハーン研究会 ニューズレター 第20号

編集：島根大学ラフカディオ・ハーン  
研究会事務局  
所在地：〒690-8504  
島根県松江市西川津町1060  
島根大学法文学部 宮澤研究室  
発行：2024年 9月 14日

## 【研究小論】

### 小泉八雲の詩論（二）：エイミー・ローウェルの「松江の椿の木」と詩の自由

横山 竜一郎（明海大学）

今年の四月に高橋栄先生からメールを受け取り、字数とテーマは自由で原稿の依頼をいただきました。当初は一月にハーン研究会で発表した博論にかんする話題を考えていましたが、この文章を書いている少し前、七月下旬にハーンについて書いた論文が出版されましたので、その話を中心に、いま私がハーン研究として考えていることの一部を書くことにします。散漫なものとなりますが、ご容赦いただければ幸いです。

論文が掲載されたのは、*Notes and Queries* というイギリスの学術誌です。1849年、ハーンとほぼ同じ頃に生まれたこの雑誌は、フォークロア（folklore）という語を造り出したとされる作家ウィリアム・トムズによって創刊され、当初こそ文学や芸術や民俗や歴史などの幅広いトピックを扱うものとして発展しましたが、現在ではオックスフォード大学出版局から刊行されるアカデミックな出版物となり、内容も英語英文学についてのものが大半を占めています。小・中学生の頃に小泉祥子先生から英語を習って以来ハーンを身近に感じながら育ち、学部生の頃に島大のハーン研究会に誘っていただき、いまでは文学研究の道歩んでいる自分にとっては、ようやくわずかながら学恩に報いることができたような気持ちで嬉しく思います。

“A Transplanted Camellia Tree: Amy Lowell’s Poetic Debt to Lafcadio Hearn”<sup>(註)</sup>と題したその論文は、このニューズレターの読者の方にはハーンの来日のきっかけにもなったパーシヴァル・ローウェルの妹と紹介すればわかりやすいでしょう

か、アメリカの詩人エイミー・ローウェルの作品に、ハーンの著作を読んで書かれたものがあることを実証的に示したものです。詩の題名は「松江の椿の木」(“The Camellia Tree of Matsue”)といっています。ハーンの読者であれば、どの著作のことを指しているか、おおよその見当はつくことかと思えます。

今回の論文は、これまで指摘されてこなかった詩の材源を発見したことに主な価値があるものですが、より大きな文脈に開かれたものでもあります。論文の最終パラグラフでも言及したことで、*「松江の椿の木」*はローウェルが編集した1917年のアンソロジー『イマジスト詩人選』(*Some Imagist Poets*)の最後に置かれています。イマジズムは20世紀の文学史の主流を決定づけたモダニズムの大きな源泉でもあり、そこにハーンのテキストが間接的に刻まれていたことは、(英語圏の)詩の歴史でのハーンの役割を再考するきっかけになることだと思われるのです。

個別の詩や詩人を扱う事例研究もこれから必要になっていきますが、理論的な側面で重要になるのは、ハーンが東大の講義で語った「裸の詩」(“naked poetry”)という概念だと現時点では考えています。四年前に本ニューズレター上に掲載した拙論でも触れたこの概念は、ある言語に特有の音声や技巧などの装飾物を引き剥がした「裸の」詩情を指すものです。このアイディアは、現代でも広く流布している、原文こそ価値があるという詩の翻訳不可能性を訴える言説と対立する、いわば詩の翻訳可能性の弁護として位置づけられます。20世紀を代表するアメリカの詩人ロバート・フロストは「詩とは翻訳によって失われるものだ」と言ったとされますが(出典不明)、ハーンは別の言語の散文に翻訳されても感情に訴えるものこそが詩だと主張します。詩とは翻訳によって生まれるものだということです。

詩の翻訳(不)可能性の問題は、否応なしに国際化が進んだ19世紀末から20世紀を生きた作家や批評家にとって、きわめてアクチュアルな意味を帯びていたに違いありません。「世界文学」

という言葉がますます広がっていることを考えれば、この話題は今もなお熟考に値するものです。詩にかんして言えば、特定の言語体系に依存した韻律を要求する定型詩の伝統が崩れ始め、より散文に接近した自由詩が（現代に至るまで）栄えるようになったこととも無関係ではないでしょう。ローウェルもまた、当時では揺籃期にあった自由詩 (*vers libre / free verse*) の優れた実践者でした。

「松江の椿の木」もその流れで書かれたものです。伝統的な英語詩の韻律を脱ぎ捨てたこの詩は、異国の伝承に触れたローウェルの詩的想像力を保存するのに適切なかたちをしています。もっとも、この作品が現代では読まれることが少なく、ローウェルの代表作として紹介されることもほとんどない詩であることは確かです。しかし、文学史は常に再評価によって作り変えられることもまた確かです。少なくとも、イマジズムが終焉する間際、ローウェルがその運動の死と重ね合わせるかのようにアンソロジーの最後に置いた、斧で切り倒されて流血する椿の木の鮮烈なイメージは、再評価に足る重要な意味を帯びていると思われまます。そして、その再評価の際には、その椿の木がハーンの文章を経由して松江の地からアメリカの詩人の想像力へと移植されたものであることもまた、忘れてはならない事実になるはずです。同時にそれは、ハーンが唱えた「裸の詩」の見事な実践例でもあるでしょう。

(註)

“A Transplanted Camellia Tree: Amy Lowell’s Poetic Debt to Lafcadio Hearn” *Notes and Queries*, Oxford University Press, 2024

<https://doi.org/10.1093/notesj/gjae092>



横山竜一郎先生・講演会より(2024.1.20)

## 【活動報告】

企画展「東日本大震災—須田郡司と小泉八雲」

宮澤 文雄 (島根大学)

今年3月、島根大学附属図書館で、企画展「東日本大震災—須田郡司と小泉八雲」を開催しました。本展は、小泉八雲を現代に生かす試みとして、東日本大震災の写真と小泉八雲の作品を鑑賞しながら、自然災害とわたしたちの関係を再考し、防災意識を高めることを目的に行いました。

展示は、①須田郡司氏の写真作品、②小泉凡氏提供の被災地写真、③小泉八雲と東日本大震災の関連、④ハーン研究会学生部の報告の4パートで構成され、展示資料はおよそ50点。さらに特別イベントとして、①学生による紙芝居口演、②震災ドキュメンタリー映画の上映も実施しました。

パート1では、写真家の須田郡司氏が、10年間撮り続けた被災地の写真作品の中から20点を展示しました。須田氏は「巨石ハンター」の異名をもつ世界中の巨石を追うアーティストです。その独特な視点は、宮城県石巻市の石神社や気仙沼市の大嶋神社の神霊が宿る磐座などの聖なる巨石と岩手県陸前高田市の高さ12.5m、全長2kmに及ぶ巨大防潮堤という人工の巨石との対比によく表れています。著書に『日本の聖なる石を訪ねて』(祥伝社、2011年)や『石の聲を聴け』(方丈堂出版、2020年)などがあります。最近では『ユリイカ』9月号に「世界の巨石信仰」という文章が掲載されました。



(企画展の準備風景)

パート2では、小泉八雲記念館の小泉凡館長が、地震発生2か月後に支援のために被災地入りした際に記録した写真10点を展示しました。とくに印象的なのは、おびただしい震災廃棄物に埋もれ墓碑のほとんどが倒れてしまった墓地の写

真です。人知れず奉納されたこけしや地蔵を写した一枚には、日常が失われることでかえって顕在化した祖先信仰の強さが捉えられています。

パート3では、ハーンの自然災害に対する幅広い関心を紹介しました。例えば、ハリケーンや疫病といった災禍によって運命を翻弄された父娘を描いた『チータ』や日本人の性格形成に地震の貢献を洞察した記事「地震と国民性」などを取り上げました。また、震災後の被災地で次々と報告される霊体験と、津波で亡くした妻の霊に会った男の話を収める柳田國男の『遠野物語』、そしてハーンの『怪談』を並べ、被災地の霊体験は「現代の民話（ゴーストストーリー）」であること、そして震災後の状況とハーンの霊性の文学との距離はとても近いことを解説しました。

パート4では、昨年9月に宮城県石巻市で実施した被災地研修を基に、島根大学ラフカディオ・ハーン研究会学生部がパネル報告を行いました。研修を通して学生たちが最も関心をもったのが「防災」でした。過去の経験を踏まえ、新しい時代を切り拓く若者世代にふさわしい内容となりました。

特別イベントの学生による小泉八雲紙芝居では、出雲かんべの里の錦織明館長が脚本を手がけ、野津尚子氏が絵を描いた『栗原屋のそばを食べたきつね』『TSUNAMI』『あみだ寺のびく尼』の三作を口演しました。



もう一つの震災ドキュメンタリー映画では、NPOげんき宮城研究所／みちのく八雲会の門間光紀氏の協力のもと、スチュウ・リービー監督作品『PRAY FOR JAPAN～心を一に～』（2011年）を無料上映しました。本作品は文科省の推薦を受けており、全国各地で自主上映会が行われ、今回が98回目の実施になりました。9月28日には、上映100回を祝した記念事業が宮城県東松島市で開催されます。

会期が春季休業と一部重なったものの、それでも716名の来場がありました。アンケートでは、「被災地の生々しい写真を見て発災当時の報道の様子を思い出しました」や「写真の説明を読んで当時の人々の苦労を感じました。気づいたら全

部読み終わってました。自分の知らない当時の様子を知ることができました」といった感想が寄せられるなど、多くの方が、鑑賞を通じて当時を振り返ったり、被災者に思いを寄せたりすることで震災をみずからの出来事として受けとめてくれました。鑑賞後に、貸出用の震災関連図書を借りていく利用者の姿も見られました。本企画展にご来場の皆様、ご協力いただいた関係者の皆様には、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

## 母校の教壇に立った話

阪本 成子

島根大学法文学部学科共通科目「共通演習 VII」において、講師として、100分間を頂き、22名の学生に対して授業をするという、私にとって初めての特別体験をさせて頂いた。宮澤文雄先生の授業である。なぜ一介の主婦の私が講師をすることになったのか、聞いてください。

### ①ストーリーテリングとの出会いと魅力

2000年春二男が小学校に入ると、学校のイベントで、初めてストーリーテリングを聴きました。とたんにその魅力にひかれました。絵本や本を使わないで、ただ口で語られたお話を耳で聴くだけです。お話は、頭の中で絵が浮かび、とても面白く楽しいものでした。時にはそのお話の不思議な世界へ連れて行かれてしまう感じの時もありました。その魅力にすっかりはまり、私もやってみようと、すぐストーリーテリングの勉強会に参加し、その秋「おはなしタムタム」というグループの一員になりました。指導者の下、地域の小学校、幼稚園、保育園へ、覚えた昔話を語らせて頂くボランティア活動を始めました。以来、20数年間細々と、自分のライフワークとして研鑽を積んできました。

### ②ストーリーテリングとは

日本や世界各地の昔話と創作話を覚えて、子どもたちに聴いてもらうというのが、ストーリーテリングです。音楽やラジオを聴いたりする楽しさと似ています。本来は、昔、囲炉裏端でおじいちゃんやおばあちゃんが娯楽に昔話を孫や子に語り、次から次へと覚えられて連綿と語り継がれてきた「口承文芸」「伝承」と言われる分野です。今日私たちが語る昔話は、文字に起こされた昔話集などを題材にしていますが、本来の伝承はいわば耳コピーです。

### ③宮澤先生の授業に参加する

宮澤先生は、島根大学ラフカディオ・ハーン研究会副会長であり、先生の研究室に会の事務局があり

ます。会の事務局員である私は、会計監査について先生とお話したある日、先生が授業で、学生さんたちにハーンの再話した昔話の紙芝居を学校ですという計画を、たまたまお聞きして、興味を持ちました。そのうち、先生から、紙芝居活動の参考に、学生たちに私の語る昔話を聴かせてやってもらえないかと依頼がありました。私は園や学校で、10～20人ばかりの少人数を対象に、親が自分の子どもに読み聞かせをするように昔話を語り、ささやかな楽しみの時間を目指しているの、初めはとても無理な話だと思いました。しかし、母校の学生さんのお役に立てるのならと心変わりして、この話が成立しました。学生たちは、短大の保育科の先生の指導を受け、「出雲かんべの里」で同じように昔話を語る語り部の話も聴いておられました。

#### ④学生紙芝居を見に行く

ある日、大学で、一般公開のイベントがありました。その中で、学生さんたちが紙芝居を披露されるというので、早速出かけて行ったところ、聴衆は多くなく、ハーン研究会メンバーも二人。でも二人の学生さんの紙芝居はとても新鮮で面白いものでした。出雲弁でユーモアある紙芝居を大いに楽しみました。

#### ⑤シラバス作成

授業の日程も決まり、宮澤先生と打ち合わせの日が来ました。私は昔話に使うテキスト本を数冊持参しました。ストーリーテリングに使う本は、語るのにいい文章に作られたものを使用します。文章を読むのと違って耳だけで聴くので、一過性です。読み返しもプレイバックして聴き直すこともできません。ですから、聴いて分かり易い文章であることや、3回の繰り返し等の特徴があります。文章だと同じ言葉や表現の多用は、時として幼稚に思われますが、昔話は繰り返しがあることで、分かり易くそこが魅力です。

ちょうど5月でしたので、節句にちなんだ「食わず女房」<sup>1</sup>を先生の前で語りました。けちん坊の怠け者の男が、嫁が欲しくなります。「ちょっとも飯は食わず、茶も飲まんでようはたらくかかが、もらいてえもんだ」とつぶやくと、その山仕事の帰り、望み通りの美しい女が嫁にしてくれと押しかけて来て、二人の生活が始まります。でもその女房は実は鬼ばばで男の留守に米蔵のコメを担いで来て大飯を食います。その形相は、トカゲかなんかです。正体を見てしまった男は腰が抜ける程たまげ、女に別れてくれと言うところで、宮澤先生の顔が固まったような眼球が大きくなったような感じでした。男は鬼ばばに変身した女に連れ去られて生きた心地もありませんでしたが、鬼ばばの苦手な自生するよもぎと菖蒲に助けられます。鬼ばばはその毒にやられて融けて死んでしまい、男は無事家に帰りつき、

それからは人々は家の軒先によもぎと菖蒲を差して魔除けにするというお話です。先生は、この長野県の昔話を、聞いたことがあると楽しんでくださったことが分かりました。

それにしても、先生に語ったのは初めてのことでした。私がどんな話を語り、どのくらいの技量があるのか確かめもされず、授業で昔話を語るこの話が進み、私はずっと私でいいのかなと思っておりました。大学の講師の資格もなければ、語りの講師資格もないし、教壇に立ったのは40年くらい前の教育実習くらいです。大学生さんの前で、昔話を語り、ワークショップのような演習を行うことになりました。

先生は、シラバスを、私との雑談のような話の中から、パソコンに打ち込み、たちまち100分間の授業内容をまとめてくださいました。二つ三つお話を披露するはずだったのに！！

先生に「私のお話しの技量もご存じないのに私でよかったのですか」とお尋ねすると、「今まで私たちの所属するハーンの会で話をする中で、大丈夫だと思ったんです」とおっしゃり、大いに驚きました。先生の発想の自由さとユニークさには、ハーンの会運営の行事立案などに際してたびたび助けて頂いてきたわけですが、その授業スタイルもその通り型にはまらないものでした。

#### ⑥授業

そういうわけで、一介のおばちゃんである私は、2024年5月23日、懐かしい大学の教室に出向き、20歳前後の若者の前で、授業を行いました。「こんにちは！」と言うと皆さんは、にこやかに「こんにちは」と返事をして下さり、一気に緊張の糸がほどけました。みんな興味深々の顔を私に向けて、私には、なんだか後輩たちの顔が、愛しい子どものように見えてきました。10分近くある「食わず女房」を語ると、皆さんの表情がいろいろに変化しました。こんな変な男の話は、幼児よりも学生さんの方が楽しんでもらえるのを実感しながら、私も一心に語らせてもらいました。その後、実習として、5分の「ふたりのあさごはん」<sup>2</sup>と3分の「ねことねずみ」<sup>3</sup>を選択してもらい、ストーリーテリングの練習してもらいました。何人かに代表して発表してもらい、みんなで自由に感想を言い合いました。予想に反して、活発な発言が続きました。宮澤先生は、すぐそばにいて見守ってくださいました。

学生さんの中に、4名の男子学生がおられました。その一人が、美保関小学校時代、ストーリーテリングを聴いた経験があると伝えてくれました。私の語りの仲間が松江市立図書館の「おはなし出前」活動で種を蒔いていて、語りを聴いた小学生が今ここに大学生となって成長しておられることに、縁を感じて感動もしました。また、地元小学校で読み聞かせや紙芝居活動をしたいと意欲的な姿勢を示す学生

さんがおられて、私の拙い昔話の語りが、学生さんたちの参考になっていれば幸いだと思いました。一方、学生さんにストーリーテリングとは何かを語ることを通して、自分の勉強になったことも痛感しました。こんな貴重な時間をくださった宮澤先生に感謝いたします。

⑦受講された学生たちの感想を一部ご紹介します。

・ろうそくの雰囲気や話し方から、話の中にどんどん引き込まれるようでした。話ごとに、話すスピードが違うことがとても印象的でした。特に、同じような展開が繰り返される「ねことねずみ」では、ねずみが頼みごとをしに次から次へと動いている様子が伝わってきました。絵がなく、言葉だけなのに、情景が浮かんできてとても楽しい時間でした。また、視線が何度も合うことで、より語りかけられているようでした。話を覚えて、紙から目を話すことで、より聴いている人に話を伝えることができるという、語りの違いを知ることができたので、紙芝居でも生かしていきたいと思います。(藤倉 彩花さん)

・...これまでストーリーテリングと縁がなく浅い理解しかありませんでしたが、阪本先生のお話を聞き、その深みを窺い知ることができました。特に印象に残っているのは、「テキストから離れる」というお言葉です。口承文芸は語りの一回性という特長をもちますが、繰り返し語られてゆく中で洗練されていき、語りの中に語り手の主体性があらわれる、こうしたこともストーリーテリングの醍醐味なのだろうと思います。(山口 大斗さん)

⑧最後に、セツさんがハーンに怪談を語った時の様子について、よく引用される文章があります。

「私が本を見ながら話しますと『本を見る、いけません。ただあなたの話、あなたの言葉、あなたの考えではなくては、いけません』と申します故、自分の物にしてしまつていなければなりませんから、夢にまでみるやうになつて参りました。」<sup>4</sup>

ここには、お話を語るストーリーテリングと共通する部分があります。ハーンの怪談もぜひ語れるようにしたいと思います。

註：

- 1 稲田和子・筒井悦子『子どもに語る日本の昔話 3』こぐま社
- 2 『おはなしのろうそく 16』東京子ども図書館、1987、18 - 19 頁。
- 3 『おはなしのろうそく 21』東京子ども図書館、1985、5 - 8 頁。

4 長谷川洋二『八雲の妻 小泉セツの生涯』今井書店、2014、327 頁

## 【例会の記録】

事務局長 横山 純子

### 第166回例会：博士論文成果報告会 & 読書会

2024年1月20日(土) 13:30~15:30

島根大学学法文学部135教室 参加13名(内2名は学生) “Jiujutsu,” p. 197, l. 14-p. 198, l. 12.

会員に、横山竜一郎氏の博論の発表を聴きたいという声があったので、この日は読書会の前に一時間程、横山竜一郎氏に博士論文成果報告の発表をしていただき、その後に活発な質疑応答をした。

横山竜一郎氏の博士論文は、2024年度広島大学大学院に提出された *John Donne: The Making of a Poet, c. 1590-1676* である。

### 第167回例会：読書会

2024年2月20日(土) 13:30~15:30

島根大学学法文学部135教室 参加9名 “Jiujutsu,” p. 198, l.12- p.202, l. 25.

### 第168回例会：読書会

2024年3月8日(土) 13:30~15:30

島根大学学法文学部 135 教室 参加 9 名 “Jiujutsu,” p. 202, l, 26-p. 207, l. 9.

### 第169回例会：読書会

2024年4月13日(土) 13:30~15:30

島根大学学法文学部135教室 参加11名 “Jiujutsu,” p. 207, l. 10-p. 210, l. 7.

### 第170回例会：読書会

2024年5月11日(土) 13:30~15:30

島根大学学法文学部135教室 参加10名 “Jiujutsu,” p. 210, l. 9-p. 213, l. 28.

### 第171回例会：読書会

2024年6月8日(土) 13:30~15:30

島根大学学法文学部135教室 参加13名 “Jiujutsu,” p. 214, l.1-p. 217, l. 6.

### 第172回例会：八雲会会員総会記念講演会に参加

2024年7月13日(土) 15:00~17:00

昨年度も会として参加を計画したが、大雨という悪天候のため、去年はキャンセルになった藤原まみ先生の講演に、今年も会として参加することにし、今年の実現できたので、大変嬉しいことであった。この講演はコロナの時代を経て漸く実現されたもので、満席だった。講演の後の八雲会の懇親会にも我々の会から 5 名が参加して八雲会と交流。

### 第 173 回例会：読書会

2024 年 8 月 10 日（土）13:30~15:30

島根大学学法文学部 135 教室 参加 9 名

“Jiujutsu,” p. 217, l. 8-p. 219, l. 12.

先生方も進んで作品を分担して担当され、ハーンの作品を読んで、皆で和気あいあいと、読書会を行っている。この日の読書会のトリの担当は常松先生で、“underlive” (p. 219, l. 12.) という単語が話題になったが、これは OED に 1655、1682 年の用例が載っており、*absolute* な語のようである。

以上が、ニューズレター第 19 号に記載した例会以降の例会報告である。読書会以外に行った活動と言えば、前述したように、2024 年 1 月 20 日の読書会の前に行った横山竜一郎氏博士論文成果報告会と 2024 年 7 月 13 日に八雲会の総会の記念講演で行われた山口大学の藤原まみ先生の講演

「ラフカディオ・ハーンの作品における群れ・感染症—モーパッサン、ジャック・ロンドンとの関係から」への参加である。

横山竜一郎氏の発表は、初期近代詩人ジョン・ダン(John Donne, 1572-1631)の 1590 年頃から死後の 1676 年頃までの期間の詩人像の形成についてであり、この期間の詩人ダンの形成には、彼の直接の友人が大きな役割を果たしたことを実証するものであった。発表後、活発な質疑応答が行われ、ダンやダンの詩からダンとハーンの間連等、様々な質問が飛び交った。ハーンはダンの詩集を所蔵していたが、ハーンの講義録にはダンのことが述べられていないようであり、またハーンとダンではキリスト教に対する姿勢が異なる等のお答えだった。学生からは博論を執筆するのにどれ位時間を要したか等論文に対する質問も出た。横山竜一郎氏が明海大学に赴任される前にこの会で発表していただけたことは我々にとって有意義なことだった。

藤原まみ先生の講演は、ハーンの作品、*Kokoro* (1896) に所収された “At a Railway Station” と *Gleanings in Buddha -Fields*(1897) に所収された

“Ningyō-no-Haka”を取り上げ、ジャック・ロンドン (Jack London, 1876-1916) やモーパッサン (Henri René Albert Guy de Maupassant, 1850-1893) の作品等と比較しながら論じたものであった。今年の資料と共に実施できなかった去年の資料も配られ、分かりやすかった。

ジャック・ロンドンは、1909 年に *Sunset Magazine* に掲載した “If Japan Awakens China” の中で、“Perhaps the one white man in the world best fitted by nature and opportunity to know the Japanese was Lafcadio Hearn” と、日本人理解の達人としてハーンを挙げ、ハーンが “the artist’s sympathy” (「芸術家的共感」) をもっていると述べていることを藤原先生は指摘された。さらにその「芸術家的共感」をジャック・ロンドンは、“his sympathy was of that order that permits a man to get out of himself and into the soul of another man, thus enabling him to look at life out of that man’s eyes and from that man’s point of view—to be that man, in short.” と、「自身から、己を出して、他者の中に入り込み、そうすることで他者の眼で物事を捉える」、即ち「他者を騙る・他者になる」ことと述べていると藤原先生はさらに指摘された。藤原先生が明らかにされたこのハーンとジャック・ロンドンとの精神的接点が、まず興味深かった。

藤原先生は “At a Railway Station” については、モーパッサンの「メゾン・テリエ」(*La Maison Tellier*, 1881) と比較して「群衆」の特徴等を紐解き、“Ningyō-no-Haka” は英語が付されていない 2 つのローマ字の言葉、“ningyō-no-haka” と “*Aa fushigi na koto da!—aa komatta ne?*” を足掛かりに作品を読み、イネが座っていた座布団に座布団をたたくというまじないをせずにそのまま座るイネの話の聴き手である “T” の身振りはジャック・ロンドンの述べた「芸術家的共感」による身振りとし、さらに家族が次々死んでいくイネの体験が「共同体の記憶」であると述べ、感染症の流行と密接に関連した作品と指摘された。作品に直接書かれてない文脈を読むことに、目を見開かれる思いがした。そしてジャック・ロンドンやモーパッサンもハーンと合わせてもっと読んでみたい気がした。

ここで個人的な感想を述べたことをお許しいただき、合わせて聴衆という群れを代弁していると思ってもらえると幸いである。又昨年果たせなかった活動を今年果たせたことを我々の会の喜びとし、20 周年記念行事に向かっていきたいものである。

---

編集後記：酷暑の夏にもかかわらず、感動的なご寄稿をいただきました皆様方に心から感謝申し上げます。(高橋栄)

---